

主 題：不安の中に輝く確かな知恵
聖書箇所：詩篇37篇1-11節

テーマ：心を騒がせるようなものが周りにあふれる中で、みことばの知恵に頼って生きていく

皆さんは不安になるような状況に陥ったとき、それにどのように反応するでしょうか？恐れやいらだちを覚えるような場面に直面するなら、それにどのように応答するでしょうか？2021年10月の下旬、ネット上である調査が行われました。その調査は、全国の二十代以上の男女500名を対象とした、不安に関する意識を調べるものでした。終わらないコロナウィルスや、身近な所や世界で起こる数々の犯罪や争い、また大きな自然災害など、ありとあらゆる問題が世の中で起こっている状況にあって、人々が何を感じているのかを把握しようとしたものです。結果は7割以上が「最近不安を感じている」と回答し、特に男性では五十代、女性では二十代から三十代の8割が「不安を感じている」と回答していました。具体的にどんなものに人々は不安を覚えていると答えていたかといえば、そのトップ3を挙げると3位はほぼ同率で、「心の健康と地震」、2位は「老後の生活や年金」そして1位は「からだの健康」でした。このような調査を見てもわかるように、人は若い人から年配の方に至るまで、どの世代の人も不安を覚えさせるようなさまざま状況に囲まれながら今を生活しているのです。そして、それはここにおられるひとりひとりも、ライブ礼拝を聞いておられる皆さんも決して例外ではありません。私たち自身も日々さまざまな状況に置かれ、心を騒がされるようなこともあるのです。どの学校に進学すればいいのだろうか？この仕事を続けるべきなのだろうか？だれと結婚して、どのように子育てをして、年金の問題が取りざたされている中でどのようにして老後を過ごせばいいのだろうか？友人のことも家族との関係も、健康や経済的なこと、また自身の信仰の歩みに至るまで…挙げればキリがないほどのいろいろな問題や課題が降りかかってくる中で、時にふと思えます。果たして、私はこのような状況の中でやっていけるのだろうか？そんな疑問を覚えたことはないでしょうか？不安定で予測もつかないことが日々起こることに対して、不安や恐れを覚えたことはないでしょうか？おそらくみな、あると思います。

私たちがきょうから見ていくこの詩篇37篇には、そんな弱さを持つ私たちが聞かなければならない大切な真理が記されています。詩篇37篇を開いてください。そして、私は「きょうから…」と言いました。というのも、これから私たちは少し時間をかけてこの詩篇を考えていきたいと思えます。一回ですべてしないのには少なくとも2つの訳があります。一つは単純に長すぎるからです。37篇は40節もあり、あまりにも触れる内容が多すぎて大変です。でも本当の理由は、この詩篇がありとあらゆることを経験した年老いた人物からの実践的で知恵にあふれた助言だからです。

この詩篇を記したのは、表題にもあるようにダビデでした。そのダビデが25節でこのように言います。「私が若かったときも、また年老いた今も、…」つまりこの詩篇は、彼が晩年に、自分の人生を振り返って記したことばだったというのです。数え切れないほどの出来事を実際に経験してきた彼が、人生で学んだ大切なことを知恵としてここに教えてくれていたのです。そうであるなら、私たちはなおさら、よくこのみことばに耳を傾けなくてははいけません。思い返せば、彼こそ、その人生においてありとあらゆることを経験し味わった人物でしたね。今まで私たちはいろんな詩篇を通して彼の姿を見てきましたが、どんなことを経験していたのでしょうか？たとえば、ダビデはいろいろな敵と戦うことがありました。巨大なゴリアテと戦うことがあれば、王として君臨した四十年の間で何度も諸外国と戦うこともありました。友に裏切られひとり孤独になったり、理不尽に悪を図る敵に取り囲まれることもありました。文字通り、いのちの危機に瀕する場面は多々ありました。無実の罪で自分の王様からいのちを狙わ

れることもありました。サウル王様から逃げている数十年の間、彼は食べる場所も寝る場所もわからない、そもそも次の日があるのかさえわからない日々を過ごすこともあったのです。ダビデはいつも健康で丈夫だったのかといえば、そうではありませんでした。彼はいのちが脅かされるほどの重い病を患って床に伏せ涙に暮れる日々を過ごすこともありました。またダビデは大きな罪を犯し、その結果に苦しむこともありました。姦淫と殺人の罪を犯したがゆえに自分の子どもを失うこともあれば、自分の子どもたちの罪を正しく指摘しなかったがために、家族の中に罪が蔓延し、息子のアブシャロムに身を迫られることもありました。皆さん、ダビデは何も知らない人物ではありませんでした。彼は人生を通して危険や苦しみ、痛みや悲しみ、喜びや平安を知っていました。敵の攻撃や友の裏切り、理不尽な扱いや病の辛さ、王としての職務のプレッシャーや子育ての難しさ、自然の脅威も、罪の恐ろしさも、またその罪に対するあわれみ深い主の赦しも、ありとあらゆることを彼は実際に味わったのです。そしてそんな彼が自分の長年の歩みを振り返ってことばを書き記していました。「これこそが、いろんな経験をして私が学んだ人生において最も大切な知恵だ」と教えてくれるのです。このような知恵は、今の私たちにとっても当然当てはまる大切なものです。この詩篇が神様のみことばであると同時に、ありとあらゆることを経験した年老いた人物からの知恵にあふれた助言であるからこそ、少し時間をかけてともに学んでみたいと思います。

この37篇のうちには大きく分けて四つの知恵を見て取ることができます。きょうは早速、ダビデが教えてくれている一つの知恵について1—11節のところを注目して見ていきたいと思います。でもまず、一度、全体をお読みします。

詩篇37篇 ダビデによる

「:1 悪を行う者に対して腹を立てるな。不正を行う者に対してねたみを起こすな。:2 彼らは草のようにたちまちしおれ、青草のように枯れるのだ。:3 【主】に信頼して善を行え。地に住み、誠実を養え。:4 【主】をおのれの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。:5 あなたの道を【主】にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。:6 主は、あなたの義を光のように、あなたのさばきを真昼のように輝かされる。:7 【主】の前に静まり、耐え忍んで主を待て。おのれの道の栄える者に対して、悪意を遂げようとする人に対して、腹を立てるな。:8 怒ることをやめ、憤りを捨てよ。腹を立てるな。それはただ悪への道だ。:9 悪を行う者は断ち切られる。しかし【主】を待ち望む者、彼らは地を受け継ごう。:10 ただしばらくの間だけで、悪者はいなくなる。あなたが彼の居所を調べても、彼はそこにはいないだろう。:11 しかし、貧しい人は地を受け継ごう。また、豊かな繁栄をおのれの喜びとしよう。:12 悪者は正しい者に敵対して事を図り、歯ぎしりして彼に向かう。:13 主は彼を笑われる。彼の日が迫っているのをご覧になるから。:14 悪者どもは剣を抜き、弓を張った。悩む者、貧しい者を打ち倒し、行いの正しい者を切り殺すために。:15 彼らの剣はおのれの心臓を貫き、彼らの弓は折られよう。:16 ひとりの正しい者の持つわずかなものは、多くの悪者の豊かさにまさる。:17 なぜなら、悪者の腕は折られるが、【主】は正しい者をささえられるからだ。:18 【主】は全き人の日々を知っておられ、彼らのゆずりは永遠に残る。:19 彼らはわざわざいのあるときにも恥を見ず、ききんのときにも満ち足りよう。:20 しかし悪者は滅びる。【主】の敵は牧場の青草のようだ。彼らは消えうせる。煙となって消えうせる。:21 悪者は、借りるが返さない。正しい者は、情け深くて人に施す。:22 主に祝福された者は地を受け継ごう。しかし主にのろわれた者は断ち切られる。:23 人の歩みは【主】によって確かにされる。主はその人の道を喜ばれる。:24 その人は倒れてもまさかさまに倒されはしない。【主】がその手をささえておられるからだ。:25 私が若かったときも、また年老いた今も、正しい者が見捨てられたり、その子孫が食べ物を請うのを見たことがない。:26 その人はいつも情け深く人に貸す。その子孫は祝福を得る。:27 悪を離れて善を行い、いつまでも住みつこうようにせよ。:28 まこと、【主】は公義を愛し、ご自身の聖徒を見捨てられない。彼らは永遠に保たれるが、悪者どもの子孫は断ち切られる。:29 正しい者は地を受け継ごう。そして、そこにいつまでも住みつこう。:30 正しい者の口

は知恵を語り、その舌は公義を告げる。:31 心に神のみおしえがあり、彼の歩みはよろけない。:32 悪者は正しい者を待ち伏せ、彼を殺そうとする。:33 【主】は、彼をその者の手の中に捨ておかず、彼がさばかれるとき、彼を罪に定められない。:34 【主】を待ち望め。その道を守れ。そうすれば、主はあなたを高く上げて、地を受け継がせてくださる。あなたは悪者が断ち切られるのを見よう。:35 私は悪者の横暴を見た。彼は、おい茂る野生の木のようにはびこっていた。:36 だが、彼は過ぎ去った。見よ。彼はもういない。私は彼を捜し求めたが見つからなかった。:37 全き人に目を留め、直ぐな人を見よ。平和の人には子孫ができる。:38 しかし、そむく者は、相ともに滅ぼされる。悪者どもの子孫は断ち切られる。:39 正しい者の救いは、【主】から来る。苦難のときの彼らのとりでは主である。:40 【主】は彼らを助け、彼らを解き放たれる。主は、悪者どもから彼らを解き放ち、彼らを救われる。彼らが主に身を避けるからだ。」

○年老いた人物からの四つの知恵

1. 主に信頼して忠実に歩むこと 1-11節

1-11節に見て取れる一つ目のダビデの知恵、それは「主に信頼して忠実に歩むこと」です。彼は最初に主に信頼すること、主にゆだねることに関して繰り返し口にしていました。3節に「【主】に信頼して善を行え。」5節には「あなたの道を【主】にゆだねよ。主に信頼せよ。」7節にも「【主】の前に静まり、耐え忍んで主を待て。」そして9節「しかし【主】を待ち望む者、彼らは地を受け継ごう。」とあります。考えてみてください。色々なことを経験してきたダビデのうちには、間違いなく数多くの知恵があふれていました。実際彼はこの詩篇を通して、ほかにもたくさんのことを教えてくれるのです。しかし、そんな彼が最初に口にしたもの、それは、「主に信頼して忠実に歩むこと」でした。これこそ、絶対に欠かせないものだ。難しさを覚える中で、彼はほかのどんなものよりもまず、主にすべてをゆだねて忠実に歩いていくことがひとりひとりにとって重要なのだ、と求めていたのです。でもこれを聞いてある人は思うかもしれません。…神様に信頼して忠実に歩むことが大切なのはよくわかります。そのことは何度も聞いてきました。でも具体的にそれは何を意味するのでしょうか？不安や恐れを抱かせるような場面に直面するとき、どのようにして主に信頼し忠実に歩むことができるのでしょうか？と。感謝なことにダビデはこの点について1-11節で詳しく述べてくれていました。特に三つの態度を挙げて、主に信頼して忠実に歩むことは、どのようにふるまうことなのかを教えてくれるのです。一つずつよく考えてみましょう。

a) 価値のないものに心を奪われないこと 1-2節

まず一つ目は、「価値のないものに心を奪われないこと」です。主に信頼して忠実に歩むということは、価値のないものに心を奪われないということです。このように1節に記されていました。「悪を行う者に対して腹を立てるな。不正を行うものに対してねたみを起こすな。」と。ここで「腹を立てるな」という命令がなされていますが、このことばにはもともと「火がつくこと」、特に「怒りで炎が燃え上がること」といった意味があります。そしてここから、何かによって悩まされてひどくイライラしたり、腹を立てたり、もっと言えば、恐れや不安を抱くというような意味にもとらえられたりするのです。ですから、ダビデがここで何を言わんとしたのかは非常に明白でした。「周りで悪者が何をしようとも、それに心を奪われて熱くならないように。どんなことが起こっていたとしてもそれに影響されて思い悩みいらだったりするのではなく、落ち着いて心配しないように。」と求めていたのです。

またそれに加えてダビデは、「ねたみを起こすな」とも命令していました。これは文字通り、不正を行うような者たちをうらやんだり嫉妬したりしてはいけない、ということです。「彼らがしていることや、彼らが持っているものを、自分も手にしたいと強く願ったり、逆に自分が持っていないものを持っている人に対して、否定的な感情を抱くようなことがあってはいけない。」と言うのです。でも、これを聞いてどうですか？残念ながら、私たちはこのような態度をとることがよくありませんか？納得できないことやあまりにも理不尽なことが周りで起これば、私たちは容易にそれらに心を奪われて誤った反

応してしまうことがあるのです。あるとき、だれかが自分に対して悪を働けば、それに憤りを覚えてやり返すことを考えるかもしれません。周りの状況に心がとらわれてしまえば、何を考えるにもそれが真っ先に頭に浮かんで、いつも心の中でつぶやいているかもしれません。どうしてあの人はあんなにひどいことをして平気でいられるのだろう？何で私がこんな目にあわないといけないのだろう？おかしいじゃないか…。このようにふつつつと怒りを燃やしたり、心が騒いで不安や失意というものを覚えて、悲しみに陥ることもあるでしょう。またあるときは、自分に持っていないものを手にしている人物を目にしてうらやんでいるかもしれません。周りを見渡してみても自分がずっと欲しいと願っていたものを何の苦もなく手にしている人がいれば、その人に強いねたみを覚えるかもしれません。私はあの人が持っているものが欲しい、どうして私にはいつまでも与えられないのだろうか？それなら、あの人もそれを失ってしまえばいいのに…。このように自分の望みや願いを叶えている人々に憧れを抱いて彼らのように生きれば自分も欲しいものが手に入るかもしれないと思い始めて、神様に従うことよりもその生き方を見習って歩もうとするかもしれません。もし私たちが周りの人や状況に心を奪われてしまえば、そのような問題が生じてしまうのです。だからこそ、ダビデは、「そういったものに心を左右されないように。悪者や不正を行う者によって、正しい道を踏み外さないように。色々なもので心奪われて、怒りを燃やしたりねたんだりするような間違った反応をしないように。」と訴えていたのです。

でも皆さん、ダビデはここで、単に「するな」と命令を与えていたわけではありません。彼にはそのような命令を口にするだけの明確な理由があったのです。その理由が続く2節にこのように記されていました。「**彼らは草のようにたちまちしおれ、青草のように枯れるのだ。**」と。今読んだ日本語の聖書では少しわかりにくいかもしれませんが、実は原文には2節の冒頭に「なぜなら」という接続詞が含まれています。つまり、ダビデはここでこう言っていたのです。「なぜ腹を立てたり、ねたみを起こしてはいけないのか？それは、彼らが草のようにすぐにしおれて枯れてしまうからだ。」と。言い換えれば、私たちを悩ませるものは一時的であって、あっという間に消え去ってしまう価値のないものだ、ということです。だからこそ、そんなものに心を奪われてはいけないということです。このしおれてしまう草木の光景は私たちの周りでも想像できると思います。そうでなくても、特に水の少ないイスラエルのような地域においては、雨が降って草木が青々としていたとしても、高温で乾燥した砂漠の風が続けて吹けば、それらはすぐに枯れて美しさを失ってしまいました。その時は、一時的に花を咲かせてきれいだったとしても、それらはずっと続くことはなくて、やがて枯れ果て、風に吹き飛ばされてしまうのです。そのようにして草木がしおれて枯れ果ててしまえば、だれもそれらを大事に集めて保管しておこうなどと考えたりはしないのです。枯れ果てた雑草を大切にしようという者はいません。不法や悪を行う者もこれと同じだということです。一時的には繁栄し、喜びや満足にあふれているかのように見えるかもしれませんが、しかし、それらはたちまち枯れてしまう草のようにいつまでも続くことはない、ということです。同じことはイザヤもこう述べていました。イザヤ40：6-8「**6 …すべての人は草、その栄光は、みな野の花のようだ。：7 【主】のいぶきがその上に吹くと、草は枯れ、花はしぼむ。まことに、民は草だ。：8 草は枯れ、花はしぼむ。だが、私たちの神のことばは永遠に立つ。**」と。ダビデは訴えていたのです。「どうして一時的なものに心を奪われるのですか？なぜ、周りにあふれている結局は価値のないようなものに心騒がせ、憤りや、怒りを抱いているのですか？どうしてそれらを熱心に追い求めようとするのですか？それらはすぐに消え去ってしまうものです。そんなものに心を奪われてはいけません。」と。アダム・クラークという聖書註解者もこんなことばを残していました。「他人の繁栄に不満を抱いたり、妬んだりするのは邪悪なものであると同時に愚かなことです。彼らが聖徒であろうとなかろうと、彼らが受ける恵みを分配するのは神ご自身であり、間違いなく、この方がご自分のものをどうにでもする権利を持っておられるのです。このような場合に嫉妬を抱くことは、神の摂理を非難することになるのです。」これが一つ目にダビデが教えてくれていたことでした。主に信頼して忠実に歩むな

ら、価値のないものに心を奪われてはいけない。一時的ですぐに消えてしまうようなものに心を騒がせて、そのようなものに自分の歩みを揺るがされてはいけないと言うわけです。

b) 価値のあるものに心を留め続けること 3-6節

続けて二つ目にダビデが教えてくれていたこと、それは、「価値のあるものに心を留め続けること」でした。主に信頼して忠実に歩むということは、単に価値のないものに心を奪われないようにするだけではありませんでした。そのようなものに揺り動かされないだけではなくて、むしろ価値のあるものに心を留め続ける必要があるのです。その内容が3-6節に記されていました。3節「【主】に信頼して善を行え。地に住み誠実を養え。」ダビデは非常にシンプルに簡潔に言っていました。「主に信頼して善を行いなさい。」言い換えれば、主のみこころに従って、主に身をゆだね、主の前に正しいことを行うということです。主の偉大なご性質と主のことばをただ信じて、主が命じておられることを喜んでその通りに成すことです。あまりにもシンプルな命令かもしれません。でも、私たちにとってこれは非常に大切なものになります。なぜか？皆さん、自分自身のこととして考えてみてください。それは、私たちが不安や恐れを抱くような状況に陥るとき、私たちは容易に神様のことを信頼することや、正しいことを追い求めることを忘れてしまうからです。そう思いませんか？自分には手に負えないような問題が降りかかってくれば、すぐに神様がどこかに行ってしまうと恐れをいだくのです。それでもどうにかして自分の力で問題を解決しようとしてもやはりどうにもできないので、ますます恐れを抱くようになってしまうことがあるのです。すべてを主にゆだねて信頼するのではなくて、自分の力や知恵に頼ろうとするので、いらだちやねたみを覚えて間違った応答をすることがあるのです。みことばに従って、「主がしなさい」とすでに言われていることを成すのではなくて、自分勝手に考えてみて、自分が望むことを成そうとすることもあるでしょう。だからダビデは言うのです。「ただ主に信頼してすべてをゆだねて、主がすでに命じておられることを行いなさい。心配しないでいい。あなたは、すでに主が『しなさい』と言われている成すべきことを、忠実に行いなさい。」と。

続けてこの箇所では、彼は「地に住み、誠実を養え。」とも口にしていました。簡潔に言うなら、これは「神様から与えられたもので満足をして、そして、その神様のうちに力や守りを見出して忠実に歩む」ということです。神様から与えられたもので満足することです。考えてみてください。神様はイスラエルの民に対して約束の土地を与えられていました。土地が与えられた者たちの責任は、当然、ほかの場所に目移りして勝手に移動することではなくて、神様から与えられたその場所を楽しんで、そこに住み続けることでした。ダビデはここでそのことに触れて言うのです。「与えられたもので満足しなさい。あなたが知っているように、あなたの必要をご存じの全知のお方が、必要なものとして与えたものでもう満足しなさい。たとえ自分にないものをほかの人が持っていたとしても、悪が繁栄しているのを目の当たりにしたとしても、それらをねたまないように。ただ、約束を守られる誠実な神様が、あなたに備えてくださったものがあるなら、それで十分満足しなさい。」と。

でも、これで終わりではありませんでした。このように4節でも付け加えています。「【主】をおのれの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。」と。ダビデは「【主】をおのれの喜びとせよ。」と口にしていました。これは、「ほかのだれでもない主のうちに自分自身の喜びを見出す」ということです。このことばについて、デレク・キドナーという聖書註解者はこんな説明をしてくれていました。「（おのれの喜びとせよに関して）これは獄中でパウロとシラスが祈るとともに賛美していたように…自分の感情を意図的に方向転換させることを含むのです。」と。どうですか？この説明をわかりやすくはないですか？思い出してみてください。パウロとシラスが使徒16章にもあるように、ピリピで捕らえられ牢に入れられたことがありました。彼らは暗くて狭い牢の中にほかの囚人と一緒に入れられて、ひどい痛みを受けたのです。彼らが牢に入れられる前には、何度もむちを打たれ痛みを覚えていました。ましてや、牢の中というものは自由など一切なくて、ほかの囚人たちのうめき声や苦しみの声というも

のが満ちあふれているような最悪な状態にあったのです。そんな中で、周りの状況に影響されて不平を口にしたり喜びを失うことはある意味容易で、ごく自然な反応だったかもしれません。でもパウロとシラスはそのような状況に心を奪われることはありませんでした。なぜなら、彼らは、方向を正しい方向に向けたからでした。彼らは主を信頼してその主に賛美をささげていたのです。彼らは状況に心を支配させるのではなくて、その状況さえも支配しておられる神様にすべてをゆだねて、その神様のうちに喜びを見出していたのです。ダビデはそれと同じことをここでも言うのです。「いろいろなものに恐れを抱いてはなりません。主に身をゆだねて、主のうちに喜びを見出しなさい。」と。皆さん、不安な状況に陥るときに、私たちは容易にその状況に目を向けて私たちの感情はそっちに向いてしまうことがあります。だから、その方向を主に向けるということが大切になるのです。「主を見上げて主を自分自身の最高の喜びとし、この方に自分の心を留めなさい。そうすれば、主に従い主のみこころにそった者の願いを主が聞き入れてくださる。」とダビデは言っていたのです。

皆さん、ここまで見てきて、ダビデの言わんとしているこの知恵がより鮮明になってきたでしょうか？主に信頼して忠実に歩むとはどういうことか？それは単に価値のないものに心奪われることを避けるだけではなくて、価値のあるものに自ら心に向けて、そこに心を留め続けることでした。流されていきそうになったとしても、見るべきところに心を留めることです。色々なものに揺り動かされるのではなくて、すべてを支配しておられる主に信頼し、揺るがない主のみことばに従い、そしてこの方のうちに喜びを見出すということ、これこそが私たちにとって、どんな状況にあらうと最高の安心をもたらしてくれるものだったのです。

そしてこの点に関して、ダビデはもう一度5-6節で強調してくれていました。「:5 あなたの道を【主】にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。:6 主は、あなたの義を光のように、あなたのさばきを真昼のように輝かせる。」ここで皆さんに注目してほしいことばがあります。それは「あなたの道を【主】にゆだねよ。」と言われているこの「ゆだねよ」ということばです。このことばは非常に興味深いもので、もともとのことばには「転がす」という意味が含まれています。石を転がす、そういった意味です。面白いと思いませんか？これは非常にわかりやすい描写でもありました。少し思い浮かべてみてください。だれかが何かを転がすとき、それは明白に、その物を元の場所から別の場所に移動させることを表していますね。つまり、この「ゆだねる」という行為は、ある人の持っている重荷を、ゆだねる相手の手に完全に移すということを言うのです。さらに、今私たちが見ている文脈で考えるなら、私たちの抱く不安や恐れ、憤り、嫉妬…そういった感情さえも、自分のうちから主のうちにすべて移動させる、というわけです。ダビデはここで訴えていたのです。「いつまでも、自分の中でしがみついて離さないようなことはしないでください。そのように自分の中に持ち続けるのではなくて、主の御手のうちにあなたの道をすべて完全にゆだねなさい。」と。5節でダビデは「あなたの道を【主】にゆだねよ。」と言っていました。「あなたの道」とは、あなたの人生そのものだ、ということです。「あなたの人生の大きい問題から小さい問題に至るまでありとあらゆること、人生に起こるすべてのものをこの主にゆだねなさい。この部分は自分が持つておきたい、ではなくて、すべてのものをゆだねなさい。」と。これと同じようなことをペテロもこのように口にしていました。I ペテロ5:7「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してく下さるからです。」このようにして心配してく下さる神様にすべてをゆだねるのであれば、ダビデは続けてこのように言っていました。「:5 …主が成し遂げてくださる。:6 主は、あなたの義を光のように、あなたのさばきを真昼のように輝かされる。」と。私たちが持っているものを主にすべてゆだねるのであれば、だれが行動してくれるのか？神様ご自身が行動してく下さるのだと。これが主に信頼する者が持つことのできる、揺るがぬ約束でした。揺るがぬ希望だったのです。確かに今は悪によって苦しめられることがあったとしても、神様はいつの日か必ず悪にはそれにふさわしいさばきを下されるのです。正しい者にはそれにふさわしく輝かしい報いを

与えてくださるのです。主にすべてをゆだねる者は、そのような変わることはない希望を持って、どんなときも歩いていくことができるのだと。それがダビデの教えてくれていた知恵でした。

そうだとすれば皆さん、私たちは何に心を留めるべきなのでしょう？ダビデは色々な困難や苦しみを人生を通して経験する中で、自分自身の愛する主をよく知りました。この方に身をゆだねることのすばらしさを学び続けていました。自分の力や知恵でどうにかすることよりも、ただ主に信頼し、主のみことばに従い、この方のうちに喜びと希望を見出すその生き方こそ、何よりも幸いなものだとわかったのです。そのダビデが今の私たちにも言うてくれるのです。「心配しないでもいい、主に信頼しなさい。恐れを抱くのではなくて、みことばに従って主の前に喜ばれることを追い求めなさい。どんなものよりも価値のある偉大な主に心を留め続けていなさい。それこそがひとりひとりにとっての最高の喜びをもたらしてくれるものなのだ。」と。「主に信頼して忠実に歩むこと」これが二つ目にダビデが教えてくれたものでした。

c) 忍耐を失わないこと 7-11節

そして最後三つ目にダビデが教えてくれていたことが残りの7-11節に記されていました。三つ目は「忍耐を失わないこと」です。主に信頼し忠実に歩いていくには、価値のないものに心を奪われず、価値のあるものに心を留め続けるだけではなくて、忍耐というものが欠かせないということです。7節からこのように続いていました。「:7 【主】の前に静まり、耐え忍んで主を待て。おのれの道の栄える者に対して、悪意を遂げようとする人に対して、腹を立てるな。:8 怒ることをやめ、憤りを捨てよ。腹を立てるな。それはただ悪への道だ。」ダビデはここで、「【主】の前に静まり、耐え忍んで主を待て。」と命令を与えていました。ここで登場している「静まり」ということばを別のことばで置き換えるなら、これは「沈黙しなさい」とか「静かにして黙ってなさい」ということです。誠実な主が必ず守ってくださるからこそ、喜びを与えてくださるからこそ、ダビデは人々に言うのです。「何があろうと怒って腹を立てたりうらやんだりするのではなくて、静まって主を待ち望んでいなさい。黙っていなさい。」と。でも、これも私たちにとって大きな難しさを覚えることかもしれません。どうしてか？それは不安や恐れ憤りを覚える状況に置かれれば、そのことに関して、私たちは容易に不平不満を口にして黙っていることができないからです。そんなことはありません？もちろんほかの兄弟姉妹に励ましを求めることが間違っているわけではありません。同じ主を愛する者たちが、重荷を分かち合って助け合うことができるのは、私たちに与えられている祝福です。でも時に、私たちは本来の目的を忘れて、ただ愚痴を聞いてもらうためだけにだれかに話しているかもしれませんし、自分の怒りや憤りをほかの人に肯定してもらうために口を開いているかもしれません。また別にだれかに対してあなたが実際にことばに口にするのがなかったとしても、自分の心の中でつぶやいているかもしれません。ことばに出していたとしても、ことばに出していなかったとしても、黙っているのではなくて私たちは口にして何かをしゃべっていることがあるのです。そんな弱さを私たちは持っています。そんな弱さを覚える私たちに対してダビデは言うのです。「静まって主を待ち望みなさい。たとえ今、悪が栄えることがあったとしても必ず主は正しいことを成されるお方、だからこそ、忍耐を持って主が働かれるその日を待っていなさい。」と。

こうしてダビデは悪に対して悪で報いてはならないということ、始めでもまたここでも教えてくれていました。周りの状況に心奪われて間違った反応をしてはいけけないのだと、繰り返し警告していたのです。一体どうして彼は何度もそんな警告をしていたのでしょうか？その理由を8節にはっきりと書いていました。「怒ることをやめ、憤りを捨てよ。腹を立てるな。それはただ悪への道だ。」気付かれたかと思いますが、ここに出てきていた「腹を立てるな」ということばは最初の1節でも見た「腹を立てるな」と同じことばです。つまりダビデは言うのです。「もしあなたが、悪者や周りの状況に対して忍耐を失って腹を立てたり不安や恐れを抱いているのであれば、自分の心が騒ぐだけではなくて、結果として自分自身も悪へと導くことになってしまいます。」と。その通りですね。うらみや怒りを抱けば、それはそ

の人のうちにだけ留まらずに、周りの人にも悪い影響与えるようになってしまいます。間違った怒りを覚えれば、ほかの人をも怒りによって傷つけてしまうことがあります。また何よりも、それは神様の前に罪を犯すことになるのです。本来なら悪者の生き方から離れるべきなのに、自分自身が悪者と同じ道をたどってしまうと。だからこそ、「静まってすべてを主にゆだねなさい。自分で何かするのではなくて、忍耐を持って待ち望みなさい。必ず主がそのことを成されるから。」とダビデは強く求めていたのです。

そしてそのことを述べた後で、最後にダビデは一つ目の知恵をまとめていました。9節からこのように続いています。9—11節「:9 悪を行うものは断ち切られる。しかし【主】を待ち望む者、彼らは地を受け継ごう。:10 ただししばらくの間だけで、悪者はいなくなる。あなたが彼の居所を調べても、彼はそこにはいないだろう。:11 しかし、貧しい人は地を受け継ごう。また、豊かな繁栄をおのれの喜びとしよう。」ここでは大きく二つの人物の異なる二つの運命が明白に記されていました。一つは悪者に対して、ダビデははっきりと言うのです。「悪を行うものは必ず断ち切られる。しばらくすれば悪者はみないなくなる時がやって来る。罪を忌み嫌われる聖なる神様は、神様に逆らうような者に、正しくさばきを下される日はやって来る。」と。それとは対照的に、主を待ち望む正しい者に関して、「神様からの守りが、喜びにあふれた祝福がある。」と述べていたのです。彼は比較していました。考えてみてください。確かに神様に従って正しく歩もうとする者は、悪によって今苦しみを受けることもあります。多くの犠牲を払うことを求められるかもしれません。でも、約束を必ず守られる主に信頼して歩む者は、この世だけではなくその後神様は正しく報いてくださる、という希望を持って歩んでいくことができるのです。

またもっと言えば、私たちがこの11節を読んだ時に、特に「しかし、貧しい人たちは地を受け継ごう。」ということばがありました。このことばは、イエス様ご自身がマタイ5章の5節で引用しておられるものです。イエス様はこの詩篇37:11節を引用してマタイ5:5でこう口にしておられました。「柔和な者は幸いです。その人たちは地を受け継ぐから…」恵みによって罪を赦され、キリスト者として造り変えられた私たちが持っている最高の希望、それはいつの日か、私たちの愛する救い主イエス・キリストと永遠をともにすることができるということです。いつ日か、王の王であるこの方が統治する新しい世界にあって、私たちもそれを楽しむことができるその時がやって来るということです。黙示録21:3—4節のところにもこう記されていました。「:3 「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、:4 彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」」もはや死もなく苦しみも涙もない、そんな輝かしい将来がほかのだれでもないイエス様ご自身によって約束されているのです。死と罪の力に勝利してよみがえり、今もなお神の右の座についておられるそのような偉大な王が、その約束を果たされる日は、必ずやって来るのです。そのように素晴らしい約束が与えられているのであれば、私たちは一体何に心を留めて生きようとするのでしょうか？確かに先の見えないこの世界にあって、私たちの手に負えない心を騒がせるような出来事は日々起こります。ひとりひとり経験するものは違います。しかし、どんなに違うものが起こったとしても、私たちはそれらすべてを支配しておられるお方を信頼して歩むことができるのです。どんなに困難なことがあろうとも、本当に価値のあるものに心を留め続けることです。誠実な主に信頼してすべてをゆだねて、忍耐を持って、この方のうちにある喜びと平安を見出して歩む者として、ともに続けて成長していきましょう。